に元文のはじめ、三五七組のゐもん千藏組のおてる、大助組のおゐんとて、至極名題の器量者有、かれは髪かしらを第一として、結構なる櫛かうがいを用ひ、多くは銀のかんざし抔にて粧ひけり、扨三人の踊子、暑氣の節は、菅笠かぶりては髪を損さすとて、三人對に日傘を青紙にて張らせ用ひたり、尤立派にして其柄を黑ぬりにして、風流成紋を附たり、是は唐土の大王傘蓋として、青き薄ものにて傘を張らせ、さしかけさすると云、通俗漢書のもの語を聞はつり、是始てさしけるなり、是世上一統に男子まで、青紙のかさをさすこそおかしけれ、今に醫師などは是を止ず、一とせ馬場讃守欽命を蒙りて、青紙日傘を公儀より御法度に被仰出けり、是を忘却しけるやらん、今又是をさす人多くあり、女は苦しからざる歟、

〔賤のをだ巻〕一寶暦の始めより、誰か青き紙にて張たる日傘をさし始めて後は、女の菅笠はすたりて、今は女の笠をかぶると云ことは絶てなし、近き比の子どもらは、女の笠かぶりたる形は、しるまじと思ふ位なり、○略中青傘は其比ことの外流行て、今はすたりたれど猶殘れり、女の髪もそこねず、扁身日を掩ふゆゑに、暑を避て甚よろし、

〔塵塚談上〕近歳は町醫者出家なども、青傘を用る者多し、我等○小川顯道明和年間、京大坂遊歴せしに、公家侍醫師出家等は、皆青傘なりき、近來江戸も京都より移りきしと見へたり、

〔甲子夜話八〕大洲侯ニ邂逅セシトキ、國々ノ寒暑ノ談ニ及ビ、我平戸ノ氣候ヲカタリ、扨豫州モ海近ケレバ、夏モ涼シカルベシト言シニ、侯ノ臣堀尾四郎次、其座ニアリテ曰ク、曾テシカラズ、暑至テ甚シ、盛暑ニ至リテハ、途行スルニ、炎氣黃白色ヲナシ、空中ニ散流シ、人目ヲ遮リ、前行十歩ナル人ハ殆ド見ヘ分タズ、其蒸熱堪ガタシ、如斯ナレバ、途行スルモノ青傘涼傘也、青傘ハ、豫州ノ方言、ヲ用ザレバ凌ガタシ、然ルニ近頃青傘ヲサスコト停止セラレシカバ、暑行尤難儀ナリト語リヌ、

〔諸國咄四〕男地藏